

田中智学の日蓮主義運動における教化の諸相

—本化宗学研究大会を中心にして—

ブレニナ・ユリア

はじめに

「教化」とはもともと仏教に由来する概念であり、「^{きょうどうけやく}教導化益」の略である。人々に法を説いて教え導き、信仰に向かわせることを意味する。同義語としてしばしば「感化」、「布教」、「伝道」という言葉が使われる。教化活動は、つねに他者との関わりが前提となるが、近代仏教においては、「個人の魂の救済というレベルに加えて社会とのかかわりの中で教化を考える」¹という傾向が顕著に見られる。こうした教化観の変化に、明治維新以降、実社会に役に立たないという批判に対処すべく、試行錯誤を重ねていった近代仏教界の姿がうかがえる。

また、明治政府により国民統合の手段として新たな学校教育制度が導入されると同時に、仏教者にも国民教化を担う「教導職」という役割が当てられ、いわゆる「三条教則」との関係の中で教義が再解釈され、教化が実践されていくことになる²。総じていえば、日本の近代仏教は、その始まりにおいて個人と社会だけでなく、広い意味での「他者」としての国家とも積極的に関わることを余儀無くされ、その教化観も大きく変化していく。もともと、教えを弘めるために国家諫暁を行った日蓮の仏教は、そもそもこうした側面が強かったのは確かである。

さらに、仏教者自身や仏教そのもののあり方も問われたことから、戒律的生活の復興を掲げる「復古主義」（福田行誠（1809-1888）、釈雲照（1827-1909）³）や、仏教をより近代的で合理的な宗教にしようとする「進歩主義」（境野黄洋（1871-1933）、高島米峰（1875-1949）⁴）などに基づいた仏教改革運動も明治期において盛んになっていく。本稿で取り上げる田中智学（1861-1939）の日蓮主義運動もまた、近代における仏教改革運動の一つであるが、在家主義を主張しつつ、新仏教徒が提唱した「自由討究」の研究方法を批判して「信」と教権にこそ宗教の本質を求めるという点では、戒律を重視する「復古主義」でもなく、また、合理的な仏教を説く「進歩主義」でもない。しかし、智学自身は自伝において、在家に戻って宗教運動を起こしたことについて、日蓮宗内に対して覚醒運動を促すとともに、日蓮宗外、

すなわち世間に対して日蓮主義を広めるのが狙いであったと述懐している⁵。それは、日蓮宗に対しては「復古」を、社会に対しては「進歩」の先に立つことをモットーとした運動であったとする⁶。

こうして、伝統的な日蓮の教えを近代的に再解釈し、独自に編みなおした思想体系を「日蓮主義」と命名した智学は、生涯にわたり幅広い教化活動⁷を展開し、公開演説会や講演会のもとより、公園や街頭で、そして機関誌などのメディアを通してその布教に努めていく。本稿では、日蓮の宗門と日本社会の双方を視野に入れた智学の教化活動の中で、特に日露戦争の前年から始まった一年間の長期講習会「本化宗学研究大会」（1903年4月～1904年4月）を取り上げるが、それは、在家の仏教者が、参加者の八割が僧侶だったということもあって主に宗門関係者を相手に、独自の教学体系を一年にわたって集中的に講じるという他に例を見ない取り組みだったからである。なお、智学の教化活動を特徴づけるものには、明治後期に始まり、大正・昭和初期に展開した芸術による教化もあるが、本稿では、まずは明治期の活動に焦点を当てる⁸。

ここで本題に入る前に、まず、教化とは何か、その内容と方法による分類に触れ、智学における教化のビジョンを明らかにしていきたい。

1. 教化の分類と智学における教化のビジョン

星野英紀は、恵谷隆戒（1902-1979）の分類を参考にしながら、教化を「直接布教」と「間接布教」に大きく分け、それぞれの特徴を踏まえつつ、その整理を行っている⁹。すなわち、直接布教は教えそのものを人々に伝えることを目的とするのに対し、間接布教は魂の直接的な救済を第一義の目的としておらず、仏教者の宗教的な信念から開始されるものとする。近代における間接布教としてもっとも盛んに行われたのは、慈善救済事業であり、吉田久一（1915-2005）の研究によってその全貌が明らかとなった。その実践は、救貧活動、医療的事業、児童保護事業、監獄教誨事業、部落解放運動、廃娼運動、禁酒運動など、実に多岐にわたる。しかし、こうした社会事業には、社会問題を生み出す要因を洞察する視点が抜け落ちており、問題の根本に迫ることができない、いわば「対症療法」にすぎないと批判されることもあったと星野が指摘する¹⁰。他方、直接布教には以下の4種類があるとする。

- ①口説布教（個人布教、団体布教、大衆布教）：もっとも古典的な形態であり、基本的な布教法である。
- ②絵などのビジュアルな手段を使っての口説布教：日本での歴史が長い布教法であり、例えば、祖師などの絵伝や、近代に入ってから幻燈、絵画、紙芝居、さらには映画などの活用もみられる。

- ③非言語的な手段による布教：儀礼や祭礼である。古くからある布教法であり、人々の感性や情緒に直接訴えるという特徴を持つ。例えば、声明などの宗教音楽、浄瑠璃や義太夫などが挙げられる。
- ④ハガキや手紙など、中間的媒介を活用する布教：メディアが媒介となる布教法である。近代においては、仏教教化のメディアが格段の進歩を遂げる。

では、智学は教化をどのように位置づけていたのであろうか。以上の分類を踏まえつつ、智学における教化のビジョンを確認したあと、日蓮主義運動におけるその実践の詳細を見ていきたい。ここでまず言わなければならないのは、智学が「教化」という言葉に特別な関心を示しておらず、置き換え可能な言葉として「布教」、「伝道」、「感化」とともに使っていることである。とはいえ、在家の身で積極的に社会の中で活動することを選んだ智学は、人々に法を説いて教え導いて信仰に向かわせる、すなわち教化することに対して、どのようなビジョンをもっていたのか、そして具体的にどのような方法でその教化を展開していったのかということが注目に値する。

さて、日蓮宗門の改革案を述べている『宗門之維新』（1901年）では、智学が布教の方法として、「言説」や「文書」だけでなく、「法験」¹¹や「看護」も挙げているのが興味深い。また、言説布教の場として、「道場」、「道路」、「海上」、「軍隊」、「工場」、「監獄」、「温泉」を提案している¹²。さらに、同書の「別論」においては、布教の統一が急務であるとし、「伝道講習所ヲ置キ布教開導ノ技倆ヲ養成シ一定ノ布教方針ニ由リテ布教セシムベシ 但シ布教ノ方針ハ必ス純正折伏ノ正規ヲ奉ゼシムベシ」（下線部筆者）とする¹³。一方、折伏と摂受についての意見をまとめた『本化撰折論』（1902年）では、宗門の「副業」としての摂受をすすめ、社会におけるこうした摂受の実践例として、「軍人布教」、「工場布教」、「慈善事業」など、さらには「悪少年感化」、「監獄布教」、「免囚感化」を挙げている¹⁴。こうして智学のビジョンにおいても、直接布教と間接布教の両方が想定されているが、間接布教の社会事業はやはりあくまでも「副業」であり、直接布教の整備が急務であるとされる。

管見の及ぶ限り、智学がもっとも体系的に直接布教の教化について述べているのは、『日蓮聖人の教義』（1910年）においてである。そこでは、在家の個人にもできる布施行の三つ、すなわち、「法施護持」、「身施護持」、「財施護持」が説かれている¹⁵。その中で、「法施」とは「法を説聞せて人を教化すること」であり、教化を通して「人を救ふこと」が「法に自然に備はりたる作用もあり、且つ佛の加被力によれる慈悲心発動するからでもある」と言う¹⁶。具体的には、「言説伝道」、「文書伝道」、そして「教育伝道」によって、法施の伝道感化を行うべきだとする。言説伝道には、「公開演説」、「教書講演」、「質疑応答」、「対話」などの形式があり、文書伝道は、言説伝道ほどその効果がすぐ見えないが、実は、「真に大なるもの」なのである¹⁷。そして、教育伝道も重要であると智学は考える。なぜならば、「いくら正法で

も、説くものがなければ弘まらない」し、「若し伝へる者がなくなれば、その道が断絶するに至る」からである¹⁸。だからこそ、「正しく伝へ巧みに教へる所の学識才操ある布教家」を養成するのが、「先決の最要条件である」と智学が主張する¹⁹。本稿で注目する本化宗学研究会は、まさに布教を担う人材の育成のための教育伝道の実践であると同時に、その布教に必要な教化のノウハウ、すなわち、言説伝道と文書伝道の講習の場でもあった。ここに智学の直接布教に対する意気込みがうかがえよう。

ところで、日蓮が行なった国家諫暁という教化方法を、智学はどのように捉えていたのであろうか。『日蓮聖人の教義』においては、それに関する詳しい記述がある。

今日の時世は、朝廷も政府も教法に対して局外となれる故、請願建白にては埒あかぬこととなり、要は信教自由の当の主たる国民を一人残らず教化するといふに在り、これ今日の「国家諫暁」なりと知るべし²⁰。

(下線部筆者)

つまり、大日本帝国憲法によって確立した信教の自由という観点からは、もはや国家諫暁を行うことが不可能である。では、国民全体を教化するには、どうすれば良いのか。国家諫暁に相当する別の方法について、智学は以下のように述べている。

国家を諫暁するといふても、今日では昔の様に朝廷や政府へ請願建白等をせずとも、一人でも多く早くこの正義に順伏する様に、感化普及を計るのが、即ち正しく確かなる「国家諫暁」である、それは『興学』と『布教』を盛にし、殊に『言論文筆の伝道』に力めて、種々たる機会を利用して、此大法を宣布する方法を講ずるのに在る、同じ『布教』といふ中にも、万人が万人、キッと行ふことの出来て、比較的正確で、比較的効果の多い伝道法は、『施本伝道』である、これは無学無筆の人でも、婦人でも児童でも、だれにでも同じく出来て、『説き違へる』の、『話し損なう』の、といふ危険がなく、その上費用も軽く、いつでも行へて、誠に自他に好適なる布教法であるから、願くは全国一般苟くも本宗教徒たるものは、男女老幼を問はず、たとひ月に一冊づつたりとも、心をそへて力の許すかぎり、伝道に適したる教書を頒施して、絶えず正法の普及をはかり、少しも早く一国同帰の時節を造るようになりたいものである²¹。

(下線部筆者)

ここで智学が国家諫暁の方法として施本伝道の有効さを力説しているのがわかる。ちなみに、追善供養や追福菩提のための施本の例は、立正安国会の会員同志によって1886年6月と1897年8月に行われたが、それぞれは智学が著した『十四謗法罪略解』と『妙宗信行要訣』の施

本にみることができる。ただし、国家諫暁を念頭に置いた大規模な施本運動は、1897年に始まる。その年の1月11日に孝明天皇の女御にして明治天皇の嫡母、英照皇太后（1835-1897）が崩御し、当時京都にいた智学は、「御大喪敬申施本事務所」を設け、翌月の葬儀の前後に『大喪法語』を施本している。その後も、機関誌の『妙宗』をはじめ、1901年には『宗門之維新』（1000部）、1905年には『勅教玄義』（84000部）、1911年には『大逆事件に於ける国民的反省』（数万部）の施本を行っている。こうした智学の施本伝道に対する熱意の背景には、ある成功事例がある。すなわち、高山樗牛（1871-1902）の日蓮主義への回心である。智学はその体験を次のようにまとめている。

僅かな一小冊子より偉大なる教績を収めるとは、『宗門之維新』の施本によりて有名な
 仏教嫌いの学者高山樗牛が、あれほど熱誠なる日蓮主義鼓吹者になった一例で見ても
 わかるであらう²²。

智学が以上で述べている通り、高山樗牛と日蓮主義を結びつけたのは施本である。明治の著名な評論家である高山樗牛は、『宗門之維新』を当時としては破格の発行部数（10万部以上といわれる）を誇っていた雑誌『太陽』の誌上で賞賛した。そのことが日蓮主義の社会普及の端緒となる。その後、1902年に没した樗牛が智学に残した「遺言」（日蓮の教義の組織的な研究とその普及）は、智学を「刺激して終に『妙宗式目』の大成を急ぐことに至った」²³。そして、完成した教義体系を本化宗学研究大会において一年間にわたって発表することになる。

以上、智学における教化のビジョン、すなわち「副業」としての間接布教と、いわば「本業」としての直接布教、そして、法施護持としての教化の位置付けとその具体的な実践方法の言説伝道、文書伝道、教育伝道について考察した。次に、智学の初期の教化活動を取り上げ、本題の本化宗学研究大会に目を移していく。

2. 還俗と初期の教化活動

吉永進一の言葉を借りれば、「仏教の近代化とは、仏教が（日本の）寺院から出て行く過程」²⁴であるが、田中智学の日蓮主義運動と教化活動はまさにその過程を端的にあらわしていると言える。

1870年、10歳の時に日蓮宗寺院の妙覚寺で剃髪・得度した智学は、その後、宗門の教育機関である飯高壇林及び日蓮宗大教院で学び、1877年に教導職試補に任命されるが、折伏を重視しないその教育に納得が行かず、19歳となった1879年に辞任届けを出し、還俗する。「祖師に還ること」を掲げ、さっそく1880年に数名の仲間と横浜で蓮華会という日蓮仏教の研究

会を結成し、在家仏教者という立場で教化活動を開始する²⁵。

智学の宗教運動が初めて「対世間的」に行われたのは、1881年9月12日である。その年は日蓮六百遠忌の年であり、9月12日というのも、日蓮宗においては龍口法難の聖日である。智学は「龍口彼処にあり」という題で横浜長者町の常清寺において公開演説会を行っている。智学自身が述懐するように、当時は仏教演説が東京や横浜を中心に盛り上がりを見せ、そのなかで弁士として最も活躍したのが、島地黙雷（1838-1911）、原担山（1819-1892）、大内青巒（1845-1918）であった。もともと自由民権運動とともに広がった日本の演説文化は、これまでの民衆教化の主な手段の一つだった僧侶の「説教」に大きな変化をもたらし、僧侶だけでなく在家の仏教者や仏教系知識人などが積極的に演説活動を行う時代になった。明治初期から「演説」に特別な関心をもっていた大内青巒は、フロックコートを着用して腕を振りながら仏教演説をした最初の人物として有名である²⁶。彼は智学と同様に在家の居士であったが、こうして明治期は、僧侶だけでなく、在家の仏教者の活躍も教化に貢献することとなっていく。

さて、智学も島地黙雷、原担山、大内青巒らの演説を聞きに行ったが、「通仏教主義」を趣旨とするこうした演説会には、「一宗に偏した話はわざわざ避けるといふ傾向」²⁷があり、そこで日蓮主義を説くことが難しいと感じる。そこで、むしろ「独立した仏教演説」を行なった方が「自分の宗義」を語ることができると考え、蓮華会単独主催の演説会を行うようになった²⁸。実際、通仏教化路線をとった大内青巒は、後に自分の活動を振り返って次のように述べている。

私は卅年来此の釈迦教を世に弘めたいと言ふことについては、ちっとも変わったことはない。何か一宗一派に凝りかたまって、田中智学の様にでもならなけりゃア、無主義無節操といふのだらうか²⁹。

大内青巒から見れば、一つの宗派の教義を主張すぎることは、やはり釈尊を中心とする仏教の復興運動に支障をきたすことになる。しかし、智学にとっては、「祖師に還って」、日蓮にならって折伏重視の活動を復活させることこそが最も重要な課題であった。こうして日蓮主義運動は初期の段階から通仏教とは違う方向に進んでいくこととなる。

教導職が廃止された1884年には、智学が東京に進出し、日蓮の『立正安国論』に由来する名の在家仏教団体の立正安国会を設立する。そのころの主な活動はやはり横浜や東京における公開演説会や講演会である。「舶来の念仏」、「龍口断刀論」、「不受布施論」、「僧侶肉食妻帯の可否」、「今生の牛肉来世の坊主」、「宗教改良とは何ぞや」、「文明国ノ宗教」といった演題からわかるように、内容は、キリスト教の批判をはじめ、日蓮の法難や日蓮仏教の教義をめぐる議論、僧侶肉食妻帯論、宗教改良論など、多岐にわたっていた。独自の取り組みとし

ては、日蓮の伝記の写真を教材にして、1886年5月に行われた幻灯写真演説会が挙げられる。また、同年8月から始まった仏教信徒衛生会の「衛生伝導」ともいべき教化実践、すなわち、流行病蔓延の際、大衆が医薬のかわりに神仏の霊水などを使用することは仏教の本意に背くだけでなく、衛生上でも問題であるとする啓蒙活動も興味深い。

また、教化を担うメディアとしては、1887年10月から始まった自家製チラシの配布をはじめ、教学雑誌の『師子王』（1891年4月創刊）や『妙宗』（1897年7月創刊）、月3回発行の新聞『日蓮主義』（1909年5月創刊）や『国柱新聞』（1912年3月創刊、1914年に教団名も国柱会に改められる）など³⁰、智学が数多くの機関誌を活用する。とりわけ、1899年4月から『妙宗』の誌友会（読者組織）が各地に誕生し、全国公私の鉄道駅943カ所の待合室（いわゆる鉄道施本運動）および軍艦や内外各汽船の海上船舶への備付けによって、その名は広く知られるようになり、『妙宗』を読んで立正安国会に入会した人も多い。大谷栄一が指摘するように、こうした機関誌を介しての教化活動は、地方会員のネットワーク化を図ったものであり、教団設立当初の演説会や講演会を通じての対面的な教化を中心とする活動と違った形で新会員を確保する仕組みとなっていた³¹。そして、次に取り上げる日露戦争前夜に開催された長期講習会、本化宗学研究大会の参加者は、その多くがこの『妙宗』を通して開催のことを知り、各地から大阪に集まったのである。

3. 本化宗学研究大会

まず、本化宗学研究大会の概要をみていこう。谷川穰が指摘するように、明治期を「教」の時代として捉えた場合、それは宗教・教育・教化の「交錯」した時代であることを意味する³²。本化宗学研究大会は、「日蓮主義的人物を作る」ことをめざし、智学の独自の宗教の価値観を、教育を通して学習者に内面化させるとともに、新しい時代の社会教化を担っていく人材の育成を目的としたものであり、まさに、宗教・教育・教化が交錯した場であった。そして、修了生たちはここで身につけた教化のノウハウを、その後、様々な形で展開していく。

この本化宗学研究大会を開くきっかけとなったのが大会開催前年に完成した日蓮仏教の組織的な教学体系「本化妙宗式目」（以下「式目」と略）³³である。日蓮開宗六五〇年記念大会を終えた智学は、1902年8月から9月にかけて鎌倉要山の書齋にこもり、11月に「式目」を完成させ、翌年の1903年4月8日から1904年4月2日までの一年間にわたって完成したばかりの「式目」の講義を中心とするこの長期の講習会を開催するのである。場所は、1895年から立正安国会の拠点の一つとなった、大阪の四つ橋にあった「立正閣」で、全国から195名（男性173名、女性22名）の参加申し込みがあり、結局、174名が泊まり込みで参加した。年齢は、上は60歳より、下は17歳におよび、参加者の八割は僧侶が占め、顕本法華宗と日蓮正宗をのぞく日蓮門下宗派の僧侶たちが集まった。ほかにも立正安国会会員をはじめ、教員、新聞記

者、会社員、銀行員、説教師、修験者、商人などの参加があったという³⁴。各宗派の袈裟の形や色が違うので、研究大会用の制服が作られ、「雄大、厳肅、快適」をモットーに本化宗学研究大会が開かれていくのである。

3.1 教育の内容

この大会の概要が紹介したところで、次にそこでどのような教育が行われたのかみていきたい。

智学は「活きた宗教教育」を行うため、①「正科修養」、②「科外補修」、③「科外兼修」から構成される教育プログラムを組む。

①「正科修養」としては、智学が「式目」を講義し、筆作述成（いわゆる作文³⁵）、そして布教練習が行われる。とりわけ日課として履行された「結縁運動」と称する布教活動が後に卒業生の教化活動の基礎を形作る。これは25人前後を単位とする5グループが、各所を30分ほどかけて一列縦隊で行進し、警句や日蓮遺文の一節が記された警告箋を道行く人々に手渡ししながら、道路布教を行うというものであった。学生たちは、日蓮遺文の一節を智学が揮毫した警世旗と呼ばれる幟を一本ずつ持ち、また行列の前後中央には「南無妙法蓮華経」と染め抜かれた玄題旗や大会旗が掲げられた。

また、「説術錬磨」と称する布教練習では、「対信徒的演説、対局外者的演説、特別対敵演説（対念仏宗徒、対基督教徒）、質問即席応辯」³⁶など、様々な相手を想定して演説の練習が行われる。さらに夏期休暇を利用して学生が全国に派遣されるが、こうした実地布教の練習も教育の一環として行われた。

②「科外補修」では、日蓮遺文の講読や朗読（御書輪講、祖訓朗読）、教学討論、安心会話、茶談会などが行われる。

③科外兼修では、智学の門下が講師をつとめ、次のような講義が行う。

- ・ 宗門史：山川智応（1879-1956）が担当する。
- ・ 仏教史：長滝智大（1871-1944）が担当する。
- ・ 西洋哲学史：大西祝（1864-1900）などの原本にもとづいての講義。山川智応が担当する。
- ・ 西洋哲学概論：高等英語の習得を兼ねて英訳パウルゼン（Paulsen Friedrich, 1846-1908）の哲学概論（*Einleitung in die Philosophie*, 1892）の原書を使い、桑原智郁（?-1921）が担当する。
- ・ 近世文学：英仏独などの文学思想の講義。武田智密（1870-1934）が担当する。
- ・ 科学雑講：武田智密及び小山時従（?-1912）が担当する。
- ・ 英語：初級レベルの授業。桑原智郁が担当する。
- ・ 看護学：受講者は女性のみ。小山時従が担当する。

ほかには、速記述、武術（剣術、柔術）、文芸の修養を目的とする思湍会しえんかいを開いて歌や詩

を創作する練習も実施し、衛生を管理するために、衛生監督陸軍一等軍医の小山時従をおき、衛生修養として室内や便所の掃除なども課された。

さらに、大会期間中、討論会、講演会、運動会³⁷、遠足、修学旅行など様々な行事が催された。なかでも二度行われた修学旅行が規模の大きい行事であった。一回目は、1903年7月20日から29日まで、京都の日蓮門下教団の16本山を5日間で回った。27日には比叡山において、日蓮の学問所跡や伝教大師の廟を訪れ、28日の大津での布教と29日の自由見学をへて、大阪に戻っている。二回目は、8月中の夏期休暇をはさんで、11月6日から12日にかけて200余名が奈良を訪れた。学生たちは道路布教をしながら、法隆寺や薬師寺、唐招提寺、法華寺、興福寺、東大寺などの南都仏教寺院、また垂仁天皇の菅原伏見東陵や帝国博物館、丹波市の天理教本部などを見て回る。9日と10日、智学は「南都仏教の古跡に対する吾人の観察」と題する講演を行っている。実は、この修学旅行の主たる目的は神武天皇陵の参拝であった。11日の午前中に訪れ、午後は陵畔のホテルにおいて智学が「皇宗の建国と本化の大教」と題する講演を4時間半にわたって行ったが、聴衆には一般人もいたとされる³⁸。

なお、研究大会が終了するおよそ二ヶ月前、1904年2月8日に日露戦争が勃発する。立正安国会の会員と生徒たちも参加する国禱会が営まれ、提灯行列や戦没者の追悼法要も行われた。女子生徒に看護学を講じ、大会中、衛生管理をしていた小山時従は日露戦争勃発後すぐ、智学や生徒たちに梅田に見送られ、「死を決して、御本尊を拝戴」して従軍医として出兵する。横山仁秀（1876-1968）のように、講義を最後まで聞くことができずに、出兵していく生徒もいた³⁹。大会終了後、6月には、大会の学監をつとめた伊東智霊（本名武彦、1852-1918）が慰問使として朝鮮に派遣され、生徒の一人であった智学の長男、田中顕一（芳谷、1884-1973）が随行し海外布教の門を開くことになる。

以上、本化宗学研究大会の概要とそこで行われた教育内容を紹介したが、次に取り上げる自活布教隊と牛乳店の経営はこの研究大会に触発された教化活動の発展であり、智学自身もそれを「副産物」と呼んでいる。

3.2 研究大会の「副産物」—自活布教隊と牛乳店「醍醐館」

研究大会は1904年4月28日をもって終了するが、6月以降、立正安国会の教職一同は全国各地の巡教を開始する。8月からは大会参加者の有志によって組織された自活布教隊の活動が始まる。山川智応が主幹として先頭にたち、荷車をひいて雑貨販売の行商をしながらの布教を行っていく。そして東京の京橋南伝馬町に本拠をかまえた隊員たちは日用品の販売（石鹼、反物、筆、薬など）で自活しながら、研究大会の講義（「式目」）の整記や布教につとめるのである⁴⁰。この自活布教隊は、智学が「昔の仏制による分衛ぶんゑの法（行乞）」に発想を得て考え出したもので、そこには教化活動の自立化を促す狙いがあった。

実は、研究大会の学費は低廉で、希望者には奨学のために免除するということもあり、会

場その他の準備に要する費用は、とても学費などでまかなえるものではなかった⁴¹。運営資金としては一万円を想定していたが、4月に研究大会がスタートし、5月末ですでに五千円を費やした⁴²。結果的に、大会実施は財政面で大きな負担となり、総支出一万四千円に対して、学生から徴収した食費相当分はわずかに千八百余円、不足分は立正安国会会員有志と智学が補うことになり、その無理が翌年以降の活動にまで影響を及ぼすことになる⁴³。こういったことが引き金となり、隊が生み出されてくるのである。

自活布教隊の活動として目を引くのは、1905年8月に始まった牛乳配達屋「醍醐館」⁴⁴の経営である。山川智応のアイデアで東京の下谷池端仲町で牛乳屋を経営することとなる。従業員は、配達員が智学の長男（顕一）と次男（澤二）を含む7-8人、蒸気による消毒の係が智学の妻、義母と女中など、智学が監督として加わり、小規模な事業であった。ユニークなのが毎日配達するビンにつけられた「乳暦」というビラである。それは、その日の干支から年中行事、古歌や小唄俗謡の類から、短文の落語や古人の逸話、多少の教訓など、道を説くとともに日常生活のミニ百科事典的な記事をのせた、いわば「小型日刊新聞」であった。例えば、1905年10月7日発行の「乳暦第七箋」では、牛乳の効き目、漬け物秘伝、川柳、乳占（「今日縁談よろしからず明日にすべし」）などと記載され、1906年1月1日の「乳暦第九十三箋」では「新年を迎ふ」との新年挨拶が記されている⁴⁵。こうした身近な話題が好評を博し、配達を頼む人のなかに牛乳よりも、この乳暦欲しさに買ってくる人もいたほどである。しかし、牛乳店の収益は思うほどなく、毎月損失がかさみ、経営には苦勞し、長続きはしなかった⁴⁶。

こうして研究大会の副産物の自活布教隊による牛乳店経営は不首尾に終わったが、主たる目的の布教家養成では一定の成果を挙げる。そこで次節において研究大会の修了生たちの活動を紹介していく。

4. 修了生たちの活躍

本化宗学研究大会に参加した生徒の八割が日蓮門下宗派の僧侶だったことはすでに述べた。彼らは入念に組まれたこの大会の教育プログラムをこなすなかで、様々な教化方法を身につけ、のちに管長職をはじめとする、日蓮宗各宗門（宗派）の運営や活動に関わる任務が任される人材となっていく。ここでは、日本国内、宗門内で活躍しつつ、教育や福祉事業⁴⁷、さらには海外布教などに取り組み、より広く社会教化活動を行った修了生たちの例を挙げて、それぞれの人物に即して、智学の「活きた宗教教育」の影響を見ていきたい。

4.1 綱脇龍妙の救癩事業

綱脇龍妙（1876-1970）は、福岡県に専業農家の次男として生まれ、16歳の時に肺結核を

患い余命3年と宣告される。菩提寺の日蓮宗寺院（福岡市法性寺）の本堂に向かって「どうぞ私が生きていても、何かのご用に立ちますならば、健康を与えてください」と願いを立て、発病して3ヶ月で奇跡的に回復する。住職のすすめで仏門に入り、法華経の常不軽菩薩品に説かれる人間礼拝に深く感動を覚え、人生の指針とする。その後福井県大道の妙泰寺に移り、京都にあった日蓮宗僧侶教育機関（松ヶ崎檀林）で本格的な学業習得をめざす。

ちょうどそのころ、田中智学を知るきっかけが訪れる。勉学中の夏期休暇を使って、福井県大道の妙泰寺に帰省した時、鯖波駅（現・南条駅）の待合室で「柱に釘が打ってかけてある美しい雑誌、しかもそれが、太陽が鮮かに宇宙を隈なく照らしている大形の表紙に『妙宗』と達筆でかかっている宗教雑誌」が目につく。『妙宗』に載っていた智学の「桂谷教話」を読み、「立派な優秀な学者が、俗人として現れているのかと、非常に嬉しかった」と綱脇が晩年に語る⁴⁸。智学が力を入れていた『妙宗』の施本伝道が功を奏したわけである。

松ヶ崎檀林を卒業した1903年3月綱脇は、智学が研究大会を開くことを知り、檀林在学中の者まで多数誘って、総勢16人で参加することとなる。資質に秀で、研究大会当時27-28歳だった綱脇龍妙が智学の代講をしたこともあり、卒業式の研究発表のときは司会者の役が任される。後に述懐しているように、研究大会は持病の喘息もおこらなかつたほど愉快的な時間であり、「生涯に又とない、華やかな月日であった」⁴⁹。

大会終了後の1906年、東京の哲学館（現・東洋大学）に在籍していた当時30歳の頃、たまたま身延山久遠寺三門付近でハンセン病患者の少年と出会ったことで救癩事業に専念することになる。内務省衛生局の意向を伺い、「国のためにやってください」と言われ、日本最初の私立救癩施設「身延深敬病院」を設立する（1942年に「身延深敬園」に改称）。以降、ハンセン病患者の救済に尽力し、1970年に95歳の生涯を閉じる⁵⁰。

実は、綱脇龍妙がこうした救癩事業に専念するきっかけは、直接の動機は別として、研究大会にもあると自ら語る。大会中、智学の講演の中に光明皇后の話があり、皇后がハンセン病患者の膿を吸い出したことを聞いて、感激して涙したことを覚えていると言う。また、修学旅行で奈良へ行った時も、光明皇后が千人の患者を洗った湯殿を見学して感激したことも述べ、「これらの感激が私の救癩事業の三分の一位の原因になっている」⁵¹と語っている。さらに、1891年に智学が池上本門寺にいたハンセン病患者を救うための病院、「大日本救世館」の計画を立て、大阪などに出張して資金集めに奔走したことがあることを知り、「先生が企画され、しかも先生のなされなかつた事業を、私が身延でしたことになり」、「先生との深い因縁」を感じていることも述べている⁵²。こうして、智学にとっては、間接布教は本業ではなかつたが、研究大会の修了生のなかでは、綱脇などのように社会事業に専念していく者が数多くいる。

4.2 木村日記の布教活動

木村日記（龍寛、1882-1965）は、旧武生町有明（現・越前市）に生まれ、1896年に福井県中津山の妙弓寺にて出家・得度する。その後、綱脇龍妙と同じく京都の日蓮宗僧侶教育機関（松ヶ崎檀林）に入学する。在籍中、本多日生（1867-1931）や野口日主（1866-1931）の講演を聞いたり、智学の著書『宗門之維新』（1901年）、『本化撰折論』（1902年）を読んだりして、「当時の宗門の思想と異なって非常に飛躍した解釈」であったその日蓮主義思想に「感心」する。とりわけ智学らが発行していた雑誌『妙宗』から得る知識の方が学校の講義よりも魅力があったと言う。

研究大会のことは、京都の共楽館で行われた智学の講演で知り、綱脇龍妙とともに参加することを決心し、研究大会の仕事をしながら月謝なしで勉学することとなる。大会中行われていた、警世旗をもって練り歩く道路布教のおかげで、「自由自在に多くの人を集めて話ができるようになった」⁵³と後に述懐する。

大会終了後は自活布教隊に入り、反物、筆、薬などの商品を車にのせて売って歩き、大阪から東海道を上がる。東京や神奈川県、静岡県、福井県などの各地を回って布教活動に励んでいく。そして東洋大学在学中には、島地大等（1875-1927）と境野黄洋（1871-1933）に留学を薦められ、この自活布教で得た旅費⁵⁴で1908年にインドへ渡る。1914年にカルカッタのサンスクリット大学（Sanskrit College、1792年創立）を卒業して、1918年から1930年までカルカッタ大学において講師として勤められたわら、インド駐在の日本人に仏教を布教する。帰国後は立正大学教授となり、サンスクリット、インド哲学、仏教学など講じながら、千葉県の日蓮宗日本寺^{にちほんじ}の住職として布教活動に勤しむ。一方で日本のラマークリシュナ協会（1897年設立）の会長や国際仏教協会（1933年設立）の常任理事をつとめ、インドに関する著作を執筆する。

田中智学とは、1915年に詩人・タゴール（1861-1941, Rabindranath Tagore）の世話役として一時帰国した際に三保の最勝閣を訪問したり、1924年に日本の大学にカルカッタ大学の出版物を寄贈する目的で帰国したときに鷺谷の国柱会を訪れたり、1931年に一之江に活動拠点を移した智学と再会したりして、その関係が続き、研究大会の「活きた宗教教育」が生涯の糧となったと語る。

4.3 高鍋日統の布教活動

高鍋日統（龍辯、1879-1953）は、九州の博多で生まれ、幼少期に博多の日蓮宗寺院、本岳寺で得度、20歳の頃には東京の池上本門寺で修行し、堀ノ内の中檀林や山梨の身延にある祖山大学院（現在の身延山大学）で学んでいる⁵⁵。本化宗学研究大会に参加することになった経緯が明らかではないが、一年間にわたって智学の教育を受け、大会の夏期休暇を使って山川智応などとともに東京、横浜、房州の実地布教を行っている⁵⁶。

大会終了後、1905年に創刊した雑誌『大垂細亜人』を通じて仏教アジア主義的な言説を主張し、また、1921年に『国難降伏論 天の巻』を公刊して以降、精力的に著作を発表していく。1922年には初めて中国北部と満州での巡回布教を開始しており、その翌年には樺太で日本軍の従軍布教も行っている。その後、1924年には、大宰府の水城跡の一角に大陸山水城院を、1927年5月には、博多湾頭に「蒙古軍大供養塔」を建立し、日蓮宗から「蒙古特命開教使」に任命され、1929年から大陸布教に励んでいる。1939年に日蓮宗から「蒙古開教監督」に任命され、同年7月には文部省宗教局長から「対支布教師」の推薦書を得て、内蒙古の病院や学校、省庁そして自坊で活発に布教活動を行っていく。こうして高鍋日統は、研究大会の「結縁運動」や実地布教の訓練で培った教化のノウハウを活かして日蓮主義に根拠づけられたアジア主義の理想を実現させるべく、生涯にわたって精力的に大陸布教に取り組んでいくのである。⁽⁵⁷⁾

5. 研究大会終了後の新たな着想—教育と芸術による教化—

以上で研究大会に焦点を当て、大会修了生たちの活躍を見てきたが、最後に、自活布教隊と牛乳店の経営に奔走していた智学は、その後、どのような教化活動を展開したのか、取り上げたい。

智学は研究大会が行われた立正閣を、1909年に大阪から静岡県の三保へ移転させる。同年3月、『妙宗』12篇3号に「本化大学創立発起の疏」を発表する。実は、智学が東京の立正閣時代にも「師子王学院」という学校建設を構想していたが、今回、日蓮門下教団の僧侶に限定せず、日本国民を対象とした国民教育を目的する大学を三保に設立することを発表する。結局、実現はしなかったが、おそらく智学は国民全体に対する教化の手段として教育伝道を位置づけ、その実現に向けて大学の設置計画を発表したと思われる⁵⁸。

この発表の翌年、三保最勝閣においておよそ3週間にわたって(1910年7月21日-8月10日)「第一回本化仏教夏期講習会」が行われる。その後も講習会が毎年続き、年2~4回開催の年もあり、1936年(7月21日-30日)に第45回目を迎える。こうした講習会は実現しなかった「本化大学」の機能を果たしていったと言えよう。講習会では、智学と教団幹部をはじめ、日蓮門下僧侶や知識人や学者(姉崎正治、1873-1949;高島平三郎、1865-1946)、軍人(小笠原長生、1867-1958)といった多彩なメンバーが講師を担当した。第二回目の講習会(1911年)を例にしてみると、参加者は寄宿者(254名)、通学者(233名)の計487名を数えた。各講師の講義のほか、茶話会、海水浴、運動会、修学旅行などの行事が盛りこまれ、参加者一同、高山樗牛の眠る龍華寺へ墓参している⁵⁹。

また、自活布教隊の活動と同じ時期に、芸術による教化も始まる。1906年4月、機関誌『妙宗』の百号記念祝賀大会において芸術伝導が創始され、日蓮の生涯を題材として智学が創作

した長唄「池上八景」、常磐津^{ときわづ}（三味線音楽の一種、語り物の音楽）の「船守」、筑前琵琶「小松原」などが演奏され、さらには、国歌「君が代」が雅楽で吹奏される。以後、立正安国会の儀式や法要では、雅楽とこうした「宗曲」が必ず演奏されるようになり、智学はさらに新体詩や謡曲、歌曲の作詞、狂言、能、演劇などの劇作を自ら行っていく。劇の例としては、1908年の新年会に演じられた喜劇『生抵当^{なま}』が挙げられる。これは智学創作の風刺小説『末法』を劇曲化したものであり、会員有志によって実演された。三保最勝閣や1916年に東京鶯谷に設立された国柱会館には、能舞台が設置され、雅楽や能楽、舞踊や劇などが演奏されていく。例えば、三保に活動拠点を移したばかりの1910年、第一回目の夏期講習会の式典では雅楽と舞楽が演奏され、大阪の国柱青年会によって能や狂言などが上演される。翌年の夏期講習会の際も、雅楽、能楽、宗曲が演奏され、とりわけ前日に高山樗牛の墓参をすませた一同は、長唄「樗牛」に感銘を受けたと言う⁶⁰。

こうした芸術による教化は、大正期に入ってから智学の聖史劇『佐渡』が1921年3月に歌舞伎座で上演されたことが大きな転機となり、翌年の1月に「国性文芸会」が創設される。法華経や日蓮の教義に加え、国体の「美」を表現する「国性芸術」（智学の命名）⁶¹を編み出し、国民の感化を目的とする教化活動を展開していく。さらに、智学はこうした芸術教化とともに、昭和期に入ってから、ラジオ講演やレコード、実写映画といった教化メディアも活用していく。まさに、明治・大正・昭和、それぞれの時代に対応しながら教化方法を変えつつ、日蓮主義に根ざした国民道徳によって社会の改善をめざしたのである。ちなみに、教化活動への貢献に対して、智学には1928年に天杯が授与されている⁶²。

おわりに

田中智学の日蓮主義運動は、在家信者を担い手とする在家仏教教団により展開されていくが、活動拠点（横浜、東京、大阪、静岡など）、組織名（蓮華会、立正安国会、国柱会）、そして機関誌名（『妙宗』、『日蓮主義』、『国柱新聞』など）の変化から見て取れるように、その教化の内容と対象も次第に変わっていく。明治期における智学の日蓮主義運動の特徴は、その教化の対象には一般社会だけでなく、宗門も含まれていたことである。だからこそ、日蓮宗門の僧侶が参加者の八割を占めた本化宗学研究大会は、日蓮仏教の復興と普及を担う人材を養成する場となっただけでなく、折伏重視の立場に基づいた積極的な教化戦略の伝授と、それを基礎づける組織教学の公表の場としても機能したのである。修了生たちの中からはそこで受けた教育を活かし、教育や福祉事業を通して社会教化を実践していく者や、木村日紀や高鍋日統などのように、日本を飛び出して教化の対象をより広く世界（アジア）に求める者も出てくる。こうして、個人の内面的深化に宗教（信仰）が影響を与えるためには、社会的な感化力を国家と国民全体にまで広げなければならないとする智学の教化に対する考え方

が、修了生のそれぞれの活動を基礎づけるものとなったのである。

1910年前後（明治末年）から日蓮主義の「黄金時代」⁶³が始まるとされるが、それは智学が行った教化活動の結果であると言っても過言ではない。冒頭で触れた教化の分類を智学の活動に当てはめてみると、初期の口説布教（演説会、講演会）に、ビジュアルな手段を活用した布教⁶⁴（写真、幻灯、絵画など）、そして、非言語的な手段を使つての布教（儀礼や音楽や舞踊などの芸術伝道）、さらには多種多様なメディア（雑誌、新聞、施本など）を通しての布教、日蓮主義の教化においては、実にその全てが有機的につながっている。むしろ、それは日蓮主義だけの特徴ではなく、近代仏教界全体に当てはまることである。ただし、智学にとっては、最終的に「国民を一人残らず教化」できたときこそ、教化活動が成功したことになる⁶⁵のであり、彼は、あくまでも「国家を教法の原動力とする」ことで、「国と共に成仏する」ことを目指した⁶⁶。個人の救済と社会レベルでの教化に加え、国家レベルの日蓮主義の普及、さらにはその次のステップとして世界における日蓮主義の広まりを教化活動の最終目標としたことが、智学の日蓮主義運動の大きな特徴である。

こうした教化の最終目標もあり、智学の教化活動は、国体の自覚を促すことで現実の日本をあるべき日本に近づけるために、大逆事件以降、国民に国体観念のさらなる普及を図る運動と密接にリンクしていく。とりわけ明治後期に始まった芸術による教化も、以前の法華経や日蓮の教義の表象に加え、国体の精神を養うものという側面を強めていく。また、智学が1925年5月に新しく結成した教化団体の明治会は、明治天皇の誕生日を祝祭日にするのを掲げ、明治節制定運動を展開する。その運動が功を奏して、1927年に明治節の11月3日が新しくカレンダーに加えられ、現在も「文化の日」として祝日となっている。ともあれ、こうしたいわば「無言の教化」⁶⁷の評価や大正期・昭和初期の日蓮主義運動における教化については次稿に譲ることとしたい。

〔付記〕

本稿は、2017年9月16日の日本宗教学会第76回学術大会（於東京大学）のパネル「仏教における〈教化〉の諸相—近世から近代へ—」にて行なった口頭発表（「田中智学の日蓮主義運動における教化の諸相」）に加筆修正したものである。

註

- 1 星野英紀「近・現代の日本仏教と教化」（石上善應監修、大正大学編『仏教の人間学—現代〔社会教化論〕への試み』すずき出版、1991年）、65頁。
- 2 谷川穰『明治前期の教育・教化・仏教』思文閣出版、2008年。
- 3 近代仏教における戒律の復古に関する最新の研究としては、例えば、亀山光明「戒律主義と国民道徳—宗門改革期の釈雲照」（『近代仏教』第25号、2018年、100-125頁）が挙げられる。
- 4 新仏教運動と「自由討究」に関しては、福島信吉「明治後期の「新仏教」運動における「自

由討究」(『宗教研究』第316号、1998年、107-132頁)を参照。

- 5 田中智学『田中智学自伝 わが経しあと』(全10巻、師子王文庫、1977年〔初出1937年〕)第1巻、315頁を参照。
- 6 同上、404頁。
- 7 智学の教化活動の詳細については、次の資料を参照した。田中芳谷監修『田中智学先生影譜』(師子王文庫、1960年)、里見岸雄監修『日本の師表田中智学』(錦正社、1968年)、田中芳谷『田中智学先生略伝』(師子王文庫、1974年)、田中香浦『田中智学』(真世界社、1977年)、田中香浦監修『国柱会百年史』(国柱会、1984年)。
- 8 大谷栄一が指摘するように、明治期における智学の日蓮主義運動は日露戦争や大逆事件などをへて国体神話を内在化し、その宗教的ナショナリズムを教化活動に取り組んでいったという特徴がある(大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館、2001年、398-400頁を参照)。この重要な論点を主軸にした教化についての考察は別稿に譲ることとしたい。
- 9 星野英紀前掲「近・現代の日本仏教と教化」、60-67頁を参照。
- 10 同上、66-67頁を参照。
- 11 法験とは、仏法の靈験、修法によってあらわれる効験のことである。智学の日蓮主義においては、その実践例を日清戦争や日露戦争などの際に行われた国禱会にみる事ができる。なお、日蓮主義における加持祈祷に関する考察は今後の課題としたい。
- 12 田中智学『宗門之維新』師子王文庫、第6版、1913年〔初出1901年〕、9頁。
- 13 同上、63頁。なお、智学の改革案においては、布教の統一を実現させる上で、布教家の養成が重要であり、一貫した教育の場が必要であるとされる。智学は次の教育機関の創立を提案している。妙宗大学(5年制)、妙宗高等学寮(4年制)、妙宗教学寮(5年制)、妙宗初心学寮(1年制)、選科学寮、寺家学寮、妙宗優婆夷林(婦人教育、寺家と教家の妻女の養成)、本山附属中学、本山付属小学(同上、94-99頁)。
- 14 田中智学『本化撰折論』師子王文庫、1914年〔初出1902年〕、268頁。
- 15 田中智学『日蓮聖人の教義』師子王文庫、第7版、1911年〔初出1910年〕、379頁。
- 16 同上、379-380頁。
- 17 同上、380-381頁。
- 18 同上、385頁。
- 19 同上。
- 20 同上、377頁。
- 21 同上、377-378頁。
- 22 同上、381頁。
- 23 田中智学前掲書『田中智学自伝』第4巻、224-225頁。
- 24 吉永進一「はじめに」(大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ—仏教からみたもうひとつの近代』法蔵館、2016年)、viii頁。
- 25 大谷栄一前掲書『近代日本の日蓮主義運動』32頁。
- 26 星野英紀前掲「近・現代の日本仏教と教化」、70頁を参照。
- 27 田中智学前掲書『田中智学自伝』第1巻、401頁。
- 28 同上、402頁。
- 29 新仏教徒同志会編『将来之宗教』新仏教徒同志会、1903年、52-53頁。なお、この大内青巒による田中智学に対する評価については、菅原研州氏に教えていただいたことに感謝申し上げたい。また、大内青巒の通仏教思想については、菅原研州「大内青巒居士の禅思想」『東海仏教』第61巻、2016年、77-93頁を参照した。
- 30 大正期・昭和初期には、日刊新聞の『天業民報』(1920年9月創刊、通称みどりの新聞、1932年に『大日本』に改題)が主要な機関紙となる。

- 31 大谷栄一前掲書『近代日本の日蓮主義運動』148頁。
- 32 谷川穰前掲書『明治前期の教育・教化・仏教』6頁。
- 33 「式目」は一年かけて講義されたが、この講義録が山川智応によって整記され、『本化妙宗式目講義録』（全5巻）として、1904年11月から1913年3月にかけて出版され、1915年に『日蓮主義教学大観』に改題された。この「式目」によって立正安国会の教学的立場が確立した。ちなみに、この著書は宮沢賢治が短い一生のうち5回ほど読み、彼の作品をはじめ、賢治の生き方そのものに影響をあたえた教書であるとされる。
- 34 大谷栄一前掲書『近代日本の日蓮主義運動』120-121頁を参照。
- 35 作文課題の例として「本化宗学研究大会に対する感想」、「本化教徒より見たる社会主義」、「友人に與へて宗教心を誘発せる書」が挙げられる（田中智学前掲書『田中智学自伝』第5巻、164頁を参照）。
- 36 同上、363頁。
- 37 大会中、お酒が一切禁止されたが、毎月一回行われた運動会の日だけ、飲酒が許された。酔っぱらって暴れないように「聖酒聖飲」の四字が印刷されたとレットルが誠めとして貼られたと、後に智学の長男・田中芳谷が回想している。（田中芳谷「慈悲建立の発動」（『本化宗学研究大会受学のおもいで』『真世界』5710号、1964年、41頁）。
- 38 この講演は『世界統一の天業』としてまとめられ、1904年4月、日露戦争の出征兵士に数千部が寄贈された。内容は、日蓮仏教と日本国体が一致するとの考えに基づき、日蓮仏教にねざした日本による道義的な世界統一と日蓮主義の指導的役割を論じたものであった。（大谷栄一前掲書『近代日本の日蓮主義運動』122頁）。
- 39 横山仁秀「『研究大会』当時の想ひ出」『真世界』2（10）（5532号）、1951年、19頁。
- 40 田中香浦監修前掲書『国柱会百年史』119頁及び207頁を参照。
- 41 田中香浦前掲書『田中智学』136頁。
- 42 田中智学前掲書『田中智学自伝』第5巻、371頁。
- 43 田中香浦監修前掲書『国柱会百年史』98頁。
- 44 田中智学「牛乳物語」『真世界』5（12）（5568号）、2-6頁を参照。
- 45 田中智学前掲書『田中智学自伝』第6巻、40-41頁を参照。
- 46 こうした苦勞もあって、智学は、房州の海辺近くに大牧場と搾取所をつくり、純良の乳をすぐに船に運び、船上で消毒を行うように設備して消毒された牛乳を配達車に積み込んで東京の各地へ運ぶ、いわゆる「房州牧場案」を考えだしたが、実現しなかった。また、牛乳業を国営化する「牛乳国営論」も打ち出している（田中智学前掲「牛乳物語」、5頁）。
- 47 研究大会修了後、教育者として活躍した中村寛澄（1874-1944）の例が挙げられる。富山県出身で京都の日蓮宗頂妙寺の僧侶であった中村が京都において1904年10月には未就学児童・貧困児童のための本化幼年学園を開設し（1908年に子守学校慈悲教育院と改称）、1908年には夜学校慈光青年会を設立し、両校は1954年に明德商業高校となった。また、研究大会修了生の小倉海静も福田育兒院（1879年に仏教諸宗派合同で貧窮孤児・貧児救済を目的として設立）の議員や、1918年に板垣退助の妻・絹子によって設立された順心女学校の経営に関わって長年その監事役をつとめ、育兒事業や女子教育に取り組んだのである。
- 48 網脇龍妙「師子王智学先生の勇姿を憶う」（『本化宗学研究大会受学のおもいで』『真世界』5710号、1964年、43頁）。
- 49 同上、44頁。
- 50 なお、娘の網脇美智が2代目園長となり、1992年12月8日に最後の入所者が国立療養所に引越し閉園となった。社会福祉法人深敬園は、1993年に身体障害者療護施設かじか寮を開設し、その後も現在まで訪問介護事業・知的障害者通所授産施設・児童デイサービスなどを運営。網脇の孫が寮長として従事している。（近藤祐昭・岡山良美「ハンセン病患者の共感・共生 網

脇龍妙「身延深敬園病院」を主として『四天王寺大学大学院研究論集』10号、2015年、46頁）。

- 51 網脇龍妙前掲「師子王智学先生の勇姿を憶う」、44頁。
- 52 同上。
- 53 木村日紀「生きた教育」（「本化宗学研究大会受学のおもいで」『真世界』5710号、1964年、53頁）。
- 54 なお、この旅費は200人ほどの福井県の日蓮門下の信者から贈られたものであったという。
- 55 高鍋日統については、大谷栄一「仏教アジア主義のゆくえ一日蓮宗僧侶・高鍋日統の内蒙古布教」（『近代仏教という視座 戦争・アジア・社会主義』ペリカン社、2012、177-213頁）を参照した。
- 56 研究大会の修了生で後に日蓮宗宗会議員となった島田勝存（1882-1966）が高鍋とともに実地布教を行ったことを回想している。（島田勝存「合掌に迎えられて」「本化宗学研究大会受学のおもいで」『真世界』5710号、1964年、50頁）。なお、高鍋は外務省外交史料館に残っている履歴書に大会への参加を自ら記している。
- 57 研究大会の修了生で高鍋日統のように海外布教に関わっていった人物として満州や朝鮮各地で布教した藤井日将（1879-1977）の例も挙げられる。大会中大阪にあった寺院から通学した藤井は、「若い時に研究大会に於て下種された教えが頭に残り、肚に入っている為に、今日長らえて布教の一端でもやらねばと思うその根本は、研究大会のおかげだ」と晩年自ら語る。（藤井日将「通学の帰りに辻説法」「本化宗学研究大会受学のおもいで」『真世界』5710号、1964年、47頁）。
- 58 大谷栄一前掲書『近代日本の日蓮主義運動』152頁。
- 59 同上、185-186頁を参照。
- 60 大橋富士子「特色ある芸術教化」（田中香浦監修前掲書『国柱会百年史』）152頁。
- 61 1925年3月に起きた原因不明の火災で演劇の稽古場であった学習所（千葉県市川市）が焼失するまでは、演劇を中心とする芸術教化が展開されたが、それ以降の教化運動は舞踊や歌唱を中心に行われるようになっていく。また、智学は「国芸学院」創立の構想をもっていたが、応急的にその準備教育の機関が1931年6月に一之江の師子王文庫に開設され、全国から応募した学院生20余名は学科・術科の教習をへて、夏期講習会や国柱会の様々な行事において習得の「国性芸術」を実演披露する。1935年5月～7月に行われた満州・朝鮮講演旅行の時も、旅順、大連、奉天、新京など各地で舞踊や舞楽が演奏される。なお、演劇に着目して「国性芸術」を取り上げた研究としては、拙稿「田中智学の「国性芸術」—思想劇『人形の家を出て』に着目して」（『同朋文化』第12号、2017年、143-170頁）を参照されたい。
- 62 なお、智学自身は国柱会の勢力が天理教や大本教などの新宗教のものには及ばないことを挙げつつ、自分の活動を次のように振り返っている。「国柱会はその創立が明治十三年である、名称は二三度変へたけれども内容は一つのもので、明治十三年以来今日に至るまで終始一貫して純日蓮主義の教風を以て、学説も布教も修行も何等微動だもせずに来て居るといふことは事実だ、唯主唱者たる私が浅学であり不徳であり極めて微力であるが故に、その勢力は甚だあがらない、後から出て来た天理教や大本教の足もとにも及ばない微々たるもので甚だ慚愧にたへないが、主張を曲げなかつたこと、知己を千載に待つといふ覚悟を以て孜孜として建設に従事して居る」（田中智学「予が見たる明治の日蓮教団」『現代佛教』第10号、1933年、562頁）。
- 63 大谷栄一前掲書『近代日本の日蓮主義運動』224頁。なお、日蓮主義の黄金時代は、1920年代初頭（関東大震災前）までとされる。
- 64 明治期に関しては、例えば、「絵画の人心を感化するは、時には言論文章以上のことがある」と考えた智学は、機関誌『妙宗』のために絵画記者（植中直斎、1885-1977）と写真記者（中川武二、生没年不詳）を置いていたことが挙げられる。（田中智学「絵画布教」『師子王全集 信感篇』1932年〔初出1908年〕、379-382頁を参照）。

- 65 筆者は、2017年9月16日の日本宗教学会第76回学術大会（於東京大学）のパネル「仏教における〈教化〉の諸相—近世から近代へ—」において、コメンテーターの谷川穰氏から、「矢継ぎ早に活動を急ぐ智学にとって、『教化』活動が成功した」とはいったいどういう実態をさすのだろうか？」という質問をいただいた。本稿は、この重要な論点を念頭において執筆したが、鋭いコメントと質問を投げかけた谷川氏に、この場をお借りして御礼を申し上げたい。なお、パネル全体の概要とコメントは『宗教研究』第91巻（別冊、2018年、82-89頁）に掲載されている。
- 66 田中智学前掲書『日蓮聖人の教義』395-396頁。
- 67 羽賀祥二は、19世紀を神殿創建と「国民教化の時代」ととらえ、後者について教部省の教化政策のみならず、各地における記念碑の建立などを通じた無言の教化や、「以心伝心」のシステムとしての神道、といった論点を示している（羽賀祥二『明治維新と宗教』筑摩書房、1994年）。筆者はそれらに加え、紀元節・天長節・明治節などの祝祭日も無言の教化の一種として捉える。

